

消 息

原口厚先生をお送りするにあたって

原口厚先生はめでたく古希を迎えられ、早稲田大学の定めにしたがって、本年3月末日をもって退職されます。先生のご退職にあたって、学部を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

原口先生は早稲田大学教育学部をご卒業ののち、早稲田大学大学院文学研究科に進まれ、修士課程および博士後期課程を経て、1992年4月に早稲田大学商学部専任講師として嘱任されました。その後、95年助教授、2005年教授に昇任され、29年の長きにわたって早稲田において教育と研究の時間を過ごされました。

先生の主たる研究対象はドイツ語読解法であり、ここ数年はご本人曰く「業務上遺言シリーズ」として『文化論集』上に7編の「ドイツ語読解の戦略と戦術」を発表されました。また、昨年末には、それらの成果をもとに300ページにおよぶ大著『ドイツ語読解法 目標と方法』（早稲田大学出版部）を出版するに至りました。「ドイツ語」に加えて「ドイツ語読解法」の授業をご担当になり、総合教育科目演習（プロゼミ）では「異文化について考える」も開講され、多くの学生の教育にあたりました。研究・教育にかかわる紹介は荒井訓先生による消息をご覧ください。

2004年9月から2年間、原口先生と私はともに大森郁夫学部長の下で教務副主任を務めました。先生は学生担当、私は教務担当です。後日、先生を副主任に推薦されたのは藤田誠先生（当時、教務担当教務主任）であることをうかがいました。学生に対する思いが強い先生ゆえ、学生担当は適任でした。この時期は、それまでの「学生運動」が沈静化し、かわって学生個々の問題が顕在化しはじめた頃です。学生担当教務主任であった故高橋敬隆先生とともにしばしば学生面談に臨まれていました。学生個々の事情はさまざまですが、それらへの対応は見事なものでした。先生の深い知識によるものと思いますが、その源泉は荒井先生も紹介されているように、研究室にある実に多様な蔵書の数々です。まさに「原口ワールド」とよぶにふさわしいさまざまなジャンルの書物

が揃っています。

副主任時代の2年間はご苦労が絶えなかったと推察しますが、後日、奥様から「いろいろな先生方との付き合いの幅が広がったと言っています。」とお聞きし、私自身も先生との個人的な関係を深める機会をいただいたことを喜んだものです。毎週木曜日、旧11号館1階にあった学部長室に詰める当番は、先生、嶋村和恵先生（当時、入試担当教務主任）、私の3人で、何事もない午後のひとときは3人で時が過ぎるのを忘れるほどおしゃべりをしました。話題は事欠かず、いまま楽しい時間を思い出すことがあります。研究室が隣同士ということもあって、その後もふらっと研究室を訪ね、他愛のない話にお付き合いいただきました。

先生との会話では、日本語の使い方がしばしば対象となります。研究室にうかがうと、学生のレポート一枚一枚を丹念に読み、詳細に添削したうえで、どのようにすれば相手に伝わるか、あるいは自分の考えを的確に表すことができるかなどを書き込んでいることがありました。いまでいう「学術的文章の表現」の授業を以前から実践されていたこととなります。先生作成の「レポートの書き方」を配付された学生は、どれだけ文章表現力を高めることができたであろうかと思います。

多くの学生は先生を「軍事オタク」や「鉄道オタク」と称しているようです。前者についていえば、上述の「ドイツ語読解の戦略と戦術」というタイトルをみてわかるように、先生ご自身のドイツ語読解法が、軍事用語を使いながら目標の達成、そのための具体策から成り立ち、「オタク」たる意味があるものです。後者については、荒井先生執筆の消息にもあるように、オタクを超えるものです。同時に、鉄道の話がされるときの先生は少年時代に戻ったようで、いつも楽しげでした。学部学生時代に地理を学ばれたこともあって、地域事情を絡めた話をお聞きしたこともあります。ご自宅のある茅ヶ崎から早稲田までの通勤にほぼ2時間を要するものの、先生にとっては、それも楽しい鉄道旅であったということができるといえるでしょう。

書物のみならず、新聞・情報誌などを含めて、何かに目をとおしておられる先生の姿が印象的でした。私の趣味とする書道の記事、私の地元である川崎に関する記事などがあると、切り抜きを頂戴するのが常でした。先生のご退職後、これがなくなることが寂しいかぎりです。

ご退職後も知識欲旺盛な先生は、さまざまな書物や文献と出会い、思索にふけること

でしょう。先生の早稲田大学とりわけ商学部に対するご貢献に心から感謝を申し上げるとともに、いつまでもご健康に留意され、お元気に過ごされることを祈念いたします。

原口先生、長きにわたり、ありがとうございました。

早稲田大学商学部長
早稲田商学同攻会会長

横山 将義